

ある老人の生活風景

牧草 泉



老人金沢仁志は、最近記憶力が衰えていく自分をなす術もなく傍観している。悲しいことだが、治療方法はない。これは、かかりつけのお医者さんからいただいたお告げなのだ。物忘れがひどくなっている。時々知人の名前が浮かんでこない。保管するときは、「ここに置くんだ」としっかりと確認しておきながら、後で必要になったとき、「あれっ、どこに置いたっけ？」とあわてるのが再三ある。でも、不思議なことに自分に好意を示してくれた？ 女性の名前だけは全く消えることがない。ひよっとしたらボケもいい加減？ などところがあるのかな？

仁志爺さんは、時々図書館に行く。狙いは新聞読みである。新聞を読まないと置いてけぼりにされたような不安感を覚えるのだ。最近図書館はいつ行っても年寄りばかりだ。ウィーク・デイはそれが普通だろう。ウィーク・デイに若者が図書館にひしめいている風景は不幸の証だ。ところが土曜・日曜に行っても若者よりは年寄りが目立って多い。みんな所在なげにうろろしている。時間をもてあま

している。非生産的で、国家の富を食いつぶす以外何ものでもない人間。最近の図書館は年寄りの時間つぶしの場となってしまうている。

規制緩和・自由競争時代を迎えて、若者は土曜、日曜なしで働いているのではないのだろうか。生産性のある若者からすれば、「俺たちから年金を搾り取って浪費する穀潰し。あんたたち、早く逝ってくださいよ」という思いだろう。

しかし、若者よ、自死するには常人の勇氣だけでは駄目なんだ。これは、年寄りが、「俺っていつまで生きるんだろうなあ」と慨嘆するのを見れば分かるはずだ。

その彼が、この頃新発見をした。この頃といってももう三ヶ月ぐらい前である。たまたまユー・チューブを覗いていたら、すごく上手な歌声が聞こえてきたのだ。それも曲名は「サン・トワ・マミー」。はっとした。越路吹雪の再来？ いや違う、彼女独特の美しい声だ。雰囲気も違う。でも、越路吹雪を凌ぐほどの素敵なステージだったのだ。声がいい、笑顔がいい、譜面どおりに歌っている、人生に疲れ果てた者をそっと癒してくれる庶民的目線の暖かい眼差し。いいことづくめのなだ。その歌手の名前は森山愛子。

それともう一つ、森山愛子がド演歌「叱らないで」を歌っているステージのバンドの指揮者。この指揮者の指揮に目がくらむほどの感動を受けたのだ。仁志爺さんは、思わ

ず「ド演歌のカルロス・クライバーだ」と叫んだのだった。そうして彼はある音楽評論家が言っていたことを思い出す。「小沢征爾の指揮にもう少し優雅さがあるといいんだけど・・・」。彼もそう思ったことがあるのだ。小沢征爾のステージを見ると、いつも幾何学の教科書に出てくる三角形や四角形、さらにはアルキメデスの原理などが頭に浮かんでくるのである。これじゃあ、演奏者はあまりにも疲れ果てて、自分の実力が出せないのではないかと心配になったのだった。ズービン・メータの指揮を見ても、幾何学的雰囲気はどこにも見られない。あれが小沢の個性だとしてもやはり物寂しい感じがするのである。

仁志爺さんは一九九二年のニューイヤ・コンサートをユー・チューブでいつも見ている。クライバーが指揮しているのだ。特に「美しく青きドナウ」は何度見ても飽くことがない。彼はクライバーとなら心中してもいいと思っている。この感激を友人にも伝えたいのだが、「あら、あんた、ホモの気もあるの？ あなたって忙しいわね」と言われそうで、そのままになっている。「俺の友人ってどうして口の悪いのばかりがいるんだろう」と嘆くこと頻りだが。ひよっとしたら、類が友を呼ぶ？

最近、女性指揮者として有名な西村智実とスミ・ジョーのジョイント・ステージを公演で見たのだが、これまた彼女の指揮棒は幾何学模様を忠実に描くではないか。彼女は

美しくスタイルもいい。であれば、これにクライバー的雰囲気や少しでも取り入れると、一段と視聴者を魅了し、さらにランク上の世界的な女性指揮者になるのではないかなと思っただけだ。今のままでは、彼女の指揮で思う存分演奏できるのは、前橋汀子とスタニスラス・ブーニンではないだろうか。北原美恵子にいたっては「私弾けません」と途中で泣き出すのでは？ と、またまた余計な心配をしたことだった。

実は森山愛子はもともと演歌歌手らしいのだ。たまたま「サン・トワ・マミー」を歌った？ 彼は、久しぶりにも大感激して彼女の「サン・トワ・マミー」を、何度も何度も聴いた。森山愛子のウィキペディアを見ると、デビューは十年ほど前。しかも新人賞を取っている。「何だ？十年も前に？」。ふとIT時代の恐ろしさを知る。

パソコンを日常の生活の友にしていけないと、情報がはいってこない。つまり、時代から見捨てられていくのだ。彼は砂漠のど真ん中に放り投げられている自分を想像した。

彼の現役時代からコンピュータはあった。当時、彼はコンピュータなるものは理系人だけが、それもマニアだけ、秀才だけが操作するものと思っていた。いや固く信じていたのだ。だから、当時からコンピュータはせいぜいワードを打つ、エクセルを少々利用する程度しか扱ってこなかった。

か品位もあるのだが、仁志爺さんはさらに想像が先走る。「講師料は月五万円。とすると年収約六十万円だ。なに？七十歳で年収六十万円？ それに比べてこの俺は？ 少ない年金の食いつぶし。くそっ。あのバアちゃん、ひよつとしたら青色申告もしていない？」と。そうして、バアちゃんに対する若干の妬みと羨望の思いと同時に、稼ぎのない自分に対してむかむかと腹が立ってくるのである。仁志爺さんの思考がとかく金銭の損得に流れるのは、生まれが水のみ百姓で、幼少時食うや食わずの生活を経験してきたからなのだ。要するに品位どころではなかったのだ。だから、下種の勘繰りだと、責めるまでもない。三つ子の魂百までの典型なのだ。

でも当の婆チャマに会うと、「おや、相変わらずきれいだね。今日も社会奉仕なの？ 大変だね。でも頑張ってる」とにこやかに挨拶はできるのである。これは年の功だろう。もつとも、相手もさる者、当然彼の心のうちは読みきっている。「あなたってあい変わらず若々しいわね。長生きしてね。機会があったらお茶でも一緒に飲みたいわ」というやさしい返事が返ってくる。機会などあるはずはないのに、また機会など作る意思もないのに。要するに、二人はいずれも優劣つけがたい超演技派なのだ。

仁志爺さんは一人になると、「俺は社会にとって不要の人間？ 典型的な穀潰し？」そんな思いがする。「俺だっ

たのだ。

いまやパソコンあつての社会人というのが当たり前になっている。あのときから学んでおけば、今頃はマニアックなIT人間になっていたものを。ひよつとしたら、会社でも課長まで昇進したんじゃないだろうかと後悔するも、もう遅い。

アナログ人間は時代遅れだ。いや社会参加の資格はない。「このオレはどうなんだ？」と、今の自分を問うてみる。パソコンを利用してするのは、音楽を聴く、本、CD、DVDをネットで購入する。ワードを使う。以前と全く同じだ。他は何に利用しているのか？ 何も無い、そして何も知らない。

ネット・オークションに参入して荒稼ぎしている二十代の女性、車をネットで購入して、ほくそ笑んでいる若者、2チャンネルを荒らしまわっている自称引きこもり、ネット株の売買をして稼いでいる中年男性。

彼の身近なところでもIT時代を遅く生き抜いている者はたくさんいる。知人の中には、長く主婦業に専念していたが、七十歳にして突如としてパソコンに開眼して学び始め、二年後自らパソコン教室を立ち上げ、まもなくカルチャー・センターから誘いを受けて、パソコン教室の先生として大活躍している婆チャマもいるのだ。すごいと感嘆することしきりである。ここまでで思考が止まればいくら

て一生懸命に働いて、社会のために尽くしてきたんだ」と叫んでも、訴えても、誰も振り向いてくれないのだ。そういえば、団塊の世代が日本を支え発展させてきたと以前は賞賛され、もてはやされていたが、いつの間にかこの団塊の世代さえも若い世代から非難されている。どうして？ と思うがよく分からない。

社会は激流の中にあるのだ。その価値観は刻一刻と変じている。そうして、プロテスタンティズム一色に彩られていく世界が目に見えなくなる。彼の頭の中には、マックス・ヴェーバーのにんまりした表情さえ浮かんでくるのだ。一神教って恐ろしいと、彼はひそかに身震いするのである。

ではキリスト教に對峙できる宗教は？ といわれると、そうすぐには回答が出ない。仏教はギリシャ・ローマの宗教と同じ次元だし・・・ヒンドゥ教はローカル色が濃すぎるし・・・希望が持てるのはイスラム教だろう。キリスト教とイスラム教が合い対峙してこそ、そこから「合」ともいべき新しい理想の社会が生まれる？ しかしイスラム教はあまりにもキリスト教に後塵を配している。イスラム教って改宗できない？ イスラム教徒と結婚すると入信しなければならぬ？ そんなことを思うと、弁証法的理想社会もなくなるとなく心もなくなってくる。いずれにしても仁志爺さんが描き求めてやまない理想郷はまだまだ先のことのようにだ。

昔、有名なお寺のお坊さんが自死した。「お坊さんも悩みがあったんだ。お坊さんでありながら、悟ることができなかったんだろうな」と思ったが、当時は若いこともあって他人事でしかなかった。今自分が老いの身になって、お坊さんの心境の一部がようやく分かったような気がする。老いること即孤独。この孤独はどうしようもなく厳しいものなのだ。これが結論である。

仁志爺さんは生きる方を選んだ。だから生きなければならぬ。なぜ？ 答えは簡単だ、死ぬ勇気がないから？ 三島由紀夫式では腹から血が飛び出して痛そうだし、芥川龍之介式では胃袋がでんぐり返り返りそうだし、太宰治式では、水を飲みすぎて苦しうだし、はたまた、「嫌疑」の小林式では、迫ってくる電車が恐ろしいし・・・。

しかし、今の彼は、ひしひしと孤独を体感しながら、そして嘆きながらも、改めて生きる勇氣、意欲が湧いてくるのをしっかりと感じている。これも森山愛子のおかげなのだ。そうして、「森山愛子のライブに行ってみよう」という思いが募ってきたのだ。もう時間が余りない。いつ死んでもおかしくない年だ。だから、是非行きたい。「一度でもいいから彼女のライブを見て、聴いてからこの世をおさらばしたい」。こういう思いが日ごとに募ってくる。

彼は、サークルの友人たちにその思いを告げて見た。「そうか、そうか。それはいいことだよ。冥土への土産に

シャンソンはもちろんのことカンツォーネも歌えるのではないかなどと、いろいろ形容詞、副詞などを華やかに鏤めて書きまくり、社長あてに送ったのだった。

やがて丁重な返事が来た。その返事には、「おつしやる」とおりで、期待に沿うように努力する」と書かれていて、さらに森山愛子直筆の「お手紙ありがとうございます。これからも心を尽くして、ファンの皆様方のために一生懸命に歌ってまいります」という色紙？ が同封されていたのだ。もちろん、仁志爺さんは至極満足したのだった。

いや、一つ不満がある。実は、ファンレターに「ド演歌のカルロス・クライバーの名前を教えてほしい」と添え書きしていたのだが、これに対する返事はなかったのだ。ド演歌のカルロス・クライバーもいまや幻の指揮者になってしまった。この手紙を仁志爺さんは後生大事に引き出しの一番奥にしまいこんだ。でも、時間がたてばそのしまいこんだ場所を、彼つて忘れてしまうのじゃないかしらん。

友人たちの悪態？ はまだ続くのである。

「東京まで？ それって、ユー・チューブで聴けるんだらう？」

「あっちこちの病院を掛け持ちしてるのに、大丈夫？ お医者さんの許可は出たの？」

「あんたって、年金生活でしょ？ お金、ないんでしょ？」

もなるよ」という返事が返ってくるかと思いきや、そうではなかった。

「あれ？ あんたにそんな趣味があったの？ あんたの好きなのってド演歌じゃなかったの？ 『昔の名前で出ています』をよく口ずさんでいたじゃないの？」

いや違うよ、最近では森山愛子の『叱らないで』や『骨まで泣きたい雪子です』を聴いてるんだよと、彼は抗弁しようとしたが、屋上屋を架すことになりそうで、ぐっと我慢したのだった。

森山愛子は、百年に一人出るかでないかの歌手でありながら、持ち歌が極端に少ない。歌手には旬がある。それを逃してはヒット曲は生まれにくい。天才歌手森山愛子は今がヒット曲を出すチャンスなのだ。仁志爺さんは、そう思うと矢も盾もたまたらずに、彼女の所属する音楽事務所にファンレターを書いたのだった。

手紙の内容をすべて表記したいのだが、紙面の都合がある、いや懐具合の都合があるのだ。同人誌としても、ただではない。投稿すると結構ボラレル？ のだ。その金額たるや馬鹿にならない。年金生活者にそんなに右から左へと出せる金はない。

要するに、森山愛子は心根のやさしい出色の歌手であること。だからもつと持ち歌を作ってやるべきであること。

いつも半額商品目当てに夜の七時過ぎに盛んにストアをささっているくせに、「

「行きはよいよいでも、帰りは自分で帰って来れるの？」

「途中で救急車に乗換え間違いないよ」

「社会が迷惑するばかりだよ」

「そうよ、近所の人にとって迷惑掛けるんじゃない？」

仁志爺さんは、さらにいくらか反論はしたものの、誰も賛成してくれる友人はいなかったのだ。結局は、うんうんとうなずく以外になかったのだった。

彼は服用している薬をひそかに教えて見る。白内障、前立腺炎、高血圧、眼炎、胃潰瘍、糖尿病、関節炎、水虫、口内炎。これにボケが加わる。ふと不安になる。大丈夫？ 友人の罵詈雑言が身近に思い出される。やはり彼らは親切で言ってくれているのかな？

「でも、行きたい。音楽は生きているんだ。今聴かないと。今日の曲は明日の曲ではない。そうなのだ、時間は待ってくれない。聴きたいと思ったとき聴かないと」

仁志爺さんは、友人たちと別れると、自転車で乗って青春18切符を求めてJR駅へと向かうのである。

二泊三日の日程。三分五十秒の至福の時間を頭に描きながら、時刻表を頭に浮かべる。

朝四時半に起きて、夕べ作っておいた朝食を済ませて自転車で駅に向かう。もちろん友人の忠告を受け入れて五食

分の弁当とお茶をバッグに入れてる。駅弁を買うよりはるかに安上がりなのだ。なぜ五食に？ それは翌日の夕食までは腐敗しないとの計算なのだ。実は、七食分つまり三日分を持って行く予定を立てていたところ、管理栄養士の資格を持っているというやかまし屋のJバアちゃんが「あんな、今の季節に三日は持たないよ、二日が限度だよ。だから五食にしなさいよ」と、さらに彼女は意地悪げな表情でのたもつたのだ「あんな、途中で食中毒でも起こしてごらんよ。周囲の人が大迷惑だよ。二日が限度だよ。後の二食？ それだったら一食はパン食、残り一食は吉野家の牛井はどう？」と。実は仁志爺さんは、吉野家で二百八十円の牛井を食べて、満足げな顔をして出てくるのをJバアちゃんから何度か見られたことがあるのだ。

でもよく考えて見ると、Jバアちゃんが勧めてくれた牛井は電車の中で食べることになるではないか。「それって変だよ、電車の中では牛井は買えないよ」と言おうかと思つたが止めた。仁志爺さんは彼女の管理栄養士の資格に恐れをなして素直に従うことにしたのだ。もちろん最後の一食もパン食に決めたのだ。

早朝五時二十四分の電車に乗る。十回ほど乗り換えて大垣に着く。大垣で二十二時四十九分発の東京行き臨時夜行列車「ムーンライトながら」に乗り換える。東京には朝五

たところ、全戦全勝。彼は東京を制覇したような目くらむほどの感激を味わつたのだ。西郷さんの銅像の前で飛び上がって快哉を叫んだのだ。そこで二段に格上げ。二段では勝率は八割程度だった。じゃあ今度は三段で打つていい？

囲碁の楽しみは、囲碁を打つだけにとどまらない、と言うよりその他のほうに醍醐味があるのだ。

大体、どの街にも必ず碁会所がある。彼は所用で出張すると必ず碁を打ちに行った。そこでの成績が勝率八割以上だと、道場破りならぬ碁会所破りの快感があるのだ。全勝でもしようものなら、旅館に戻る足取りは軽く、鼻歌さえ出るのだった。

仁志爺さんの会社勤めは係長補佐止まりで定年を迎えた。思えば上司から怒鳴りつけられ部下からは軽蔑の目で見られる毎日だった。自尊心は踏みつけられ、叩きつけられ、ずたずたになった。しかし、必死で会社にしがみついていたのは、一つは他ならぬ、「これ以外に俺のできる仕事はない」と悟つたがためなのだ。

でも、振り返ってみると、同僚よりははるかに出張が多かったようだ。口の悪い友人から、「お前は出張以外取り柄がないんだな」を言つて冷やかされたが、ひよつとしたら、俺も意外と会社の役に立っていたのかな？ と、最近になつて思うことができるようになった。つまり、他の同

時五分に着く。夕方五時までは東京見物。

東京スカイツリーに行つてみたいが、入場料は二千六千円である。とてもそんなゆとりはない。だから彼は上野の碁会所で一日を過ごすことを予定している。ここなら千円も出せば、終日遊べる。二日目の朝食は上野駅のホームのベンチでとり、昼食は碁を打ちながら済ます。つまり右手で握り飯をほお張り、お茶を飲みつつ、左手で碁を打つという按配だ。彼は囲碁を打つときは左利きなのだ。そうして夕食は碁会所を出る直前にとる。

仁志爺さんの囲碁の腕前は初段程度である。正式な段位は持たない。日本棋院の段位を取ろうとすると、かなりなお金が必要なのだ。三十代のときに日本棋院の段位認定試験で九十八点を取り、四段を認定するという連絡を受けた。飛び上がつて喜んだが、その段位取得料が六万円とあり、びつくり仰天、そのままになっている。また関西棋院の試験も受けてみたが、百点満点。こちらは五段を認定するという。段位取得料はこれまた七万円、当然これも辞退。

大体、日本棋院認定の段位は甘い。もちろん関西棋院の段位認定はさらに甘い。田舎で打つと彼の實力は初段が相応なのだ。勝率が四割から六割を上下する程度だから。

彼は、上野の碁会所では二段で打とうと思つている。若い時分に、東京に出張したとき、同じ碁会所で初段で打つ

僚より飛びぬけて出張が多かったのは、「俺が他社との交渉において優れていたからではなかったのか？」とも思えるからだ。

それにもう一つ、彼が会社を辞めなかつた理由は、この碁会所破りをする過去忌まわしい思い出が癒されることを知つたのだ。上司からの圧力、部下からの突き上げ、このサンドイッチの悲哀が一瞬のうちに吹き飛んでしまうのだ。彼は自尊心が傷つくたびに、碁会所破りをして、そのベクトルをゼロにしてきたのだった。もし囲碁を知らなかつたら、彼の一生はどうなつたのだろう。おそらく職を転々として、ぼろぼろの状態で終焉を迎えたのではないだろうか。

仁志爺さんはこの快感は自分だけのものだろうと思つていた。ところが、それは彼の思い違ひだった。碁会所に行くくと、「道場破りをしてきた」とか、「返り討ちにあった」とか、「大阪の敵を東京で討つた」とか、いう話が時々聞こえてきたのだ。なかには返り討ちにあつて、早々に職場に休暇届を出して、再度その仕返しに津軽海峡を渡つて札幌の碁会所に旅立つという兵もいた。

やはり仕事場での鬱憤を碁で発散させている者がいるんだなあ、彼は同志がいることにとても心強く思つたことだった。

夕方五時に基会所を出て会場へ。ライブは七時開演、そして九時終演。三分五十秒の森山愛子の「サン・トワ・マミー」を堪能し、ド演歌に聴きほれてライブ終了。直ちに地下鉄で東京駅へ直行。東京駅夜十一時十分発の「ムーンライトながら」で大垣まで。それから行きと同じく十回ほど乗り継いで、夜の八時に帰着予定。

息子が東京にいるが、知らせない、当然立ち寄らない。この恍惚の旅を知れば、頭ごなしに、「お父さん、自分の年も考えなきやあ。親子は他人の始まりじゃないか。俺は世話なんてごめん蒙りたいね」と、嫌味を言われるのが落ちだ。そんなのつてご免蒙りたい。仁志爺さんに「それって兄弟の誤りじゃないのか？」と抗う勇気などないのだ。

つぎに彼は車中での読書を考える。旅路は長い。往復四十八時間の旅、睡眠時間十六時間を差し引いても三十二時間が残る。であれば、本を四、五冊は読破できるはずだ。

何を持っていいのかな？ ニーチェ？ 羽入辰郎？ カミュ？ 小林秀雄？ 神谷恵美子？ 梶谷哲男？ 小谷野敦？ ジェフリー・アーチャー？ 柄谷行人？ 吉本隆明？ 窪田般彌？

「やっぱり、柄谷行人はやめとこ、気取ってるからな」と、彼は、自分の理解力のなさを棚に上げての横暴。要するに年寄りば身勝手なのだ。仁志爺さんも例外ではない。

本当は神谷恵美子を筆頭に上げたいのだが、彼女はウル

れは十二分に理解できるのだ。なぜなら、彼女の心情は彼のカルロス・クライバーへの心酔と同じ次元なのだ。ひよつとしたら、彼の方が神谷恵美子よりはずっと判断能力の喪失度合いはひどいかもしれない。彼は一九九二年のニューイヤール・コンサートを視聴しながら、そう思うことがある。

作中の人物との距離を見事に描ききったのは、『昭和遊女考』の著者竹内智恵子である。語り部に徹しながら、遊女の生活を描写していくのだが、作者の遊女への情愛がひしひしと伝わってくる。竹内智恵子の遊女との間の取り方は見事というほかはない。読みながらついつい涙目になったものだった。二十世紀後半の名著、古典として生き続ける作品だと、彼は思っている。

神谷恵美子の『バージニア・ウルフ研究』に比べると梶谷哲男の『三島由紀夫』はすごく読みがある。作者と作品に鋭く切り込んでいて面白い。パトグラフィーとしては優れた著書となっている。だから、おそらく神谷恵美子は候補から消えるのではないだろうか。ところが、そうは思いつながら、仁志爺さんはそれでも神谷恵美子を捨てきれないでいる。それは他に理由があるからなのだ。でもこの理由は誰も知らない。結論として彼が神谷恵美子を持つて行くことは間違いない。

しかし、仁志爺さんには一つの大きな不満がある。それ

フに心酔しすぎて、というより恋してめろめろである。だから文学を学び、医学部で精神科を専攻したにしては、彼女のウルフ論はひどく切り口が甘いのだ。人物論を書く場合、その客体との距離をよほど心して弁えないと、かえって読者に白々しい思いを抱かせてしまう。

例えば、柳田邦男が次男の自死をエッセイ風に書いていたが、子息に対する著者の心情は分かるとしても、読者としてはどうしてもその心情を共有できなかった。もう少し距離を置いて子息の死を見るべきだったと思う。これはある新聞の書評欄で書評子も触れていた。

また三十年ほど昔のことになるが、竹本千吉が『人間・林芙美子』を著した。なかなかよく調査して資料を集めているのだが、彼女への思い入れが深すぎて、商人にすぎない彼女の父親を義人に祭り上げてしまっている。こうなると、ひいきの引き倒しで、人間・林芙美子はどこかへ消し飛んでしまい、資料としての価値以外何もないということになってしまふ。一介の商人が義人であることは、生き馬の目をも抜く商売の世界では常識では到底ありえぬことなのだ。おそらく父親は倫理の最低ラインを彷徨しながら、間歇的に善行をしたということだろう。商いという行為は、倫理規範に基づいて行われるのではない。商いはあくまでも法的規範に規制されて行われる行為なのだ。

しかし、仁志爺さんは、神谷恵美子のウルフへの思い入

は、日本にはパトグラフィーの権威者が少ない、いや、あまりにも少ないということだ。例えば、古くは『病跡からみた作家の軌跡』など、いろいろパトグラフィーに関連した本は出版されているが、ひどく通俗的で、どれもこれも、内容はパトグラフィーには程遠い。また外国に比しても極端に貧弱過ぎる感があるのだ。日本の作家だけを見ても、パトグラフィーの客体に不足はないはずである。日本人にはパトグラフィーは生来的に向いていないのではないかとさえ思えてくる。

彼からすると、日本人のこの分析力・検証力・判断力のなさが、太平洋戦争の要因となった？ そうして敵味方六百万人の生命を奪った？ そんな思いにとらわれることさえあるのだ。でも、彼はこのことを誰にも言ったことはいない。友人にでも言おうものなら、「あんた、とうとう妄想の気が出てきたよ。早く病院に行ったほうがいいよ」と言われそうだから。

生きる目的を持った老人は輝いているようだ。おそらく仁志爺さんは東京行きを決行するだろう。

でも、復路をたどることができるかどうかは誰も知らない。これは彼を前にして、かかりつけのお医者さんが脅かすように、そうして畳み込むように言ったことだから。「復路は大丈夫だと思ふよ。でも復路は保証の限りではないね」

お医者さんのこの一言はずしんとこたえるのだ。

少なくとも往路は全うしたい、復路は、東京駅でこと切れるのか、大垣駅のホームで倒れるのか、あるいは尾道あたりでこん睡状態に陥るのか、彼自身にも分からない。

でも彼はふと思う、果てるなら尾道がいいと。なぜなら、尾道は、彼の好きな林芙美子が尾道市立高等女学校を卒業するまで六年間生活していたゆかりの地だから。

彼は若いとき、林芙美子の足跡を辿って問い訪ねたことがある。下関、尾道、北九州、鹿児島、屋久島など。屋久島に行ったときは、ここが、彼女が宿泊していた「屋久島山荘」だと、ガイドさんが教えてくれた。ここで、降りしきる雨を眺めながら作品「浮雲」の構想を練ったんだなと思うと、「屋久島は月のうち三十五日は雨という位でございますね」という一節が浮かんできて、ジーンと胸が熱くなったのだった。

彼は、できればもう一度屋久島に行き、屋久島山荘に数日宿泊して、雨の屋久島を実体験してみたいという希望を持つている。屋久島山荘は今でも現役なのだ。でも内心では「もう時間がない、行けずに終わるのだろうな」というあきらめの心境である。

尾道を訪れたときは、山肌を削ってできた狭い石段を登りながら、胸が熱くなったことを思い出す。耳元で彼女の歩く下駄の歯音が聞こえてくる錯覚にとらわれたのだった。

もし目の前に林芙美子がいたら、しっかりと抱きしめてやりたい。「したたかに生きたんですね」と言つて。でも、「あんた誰なの？ あんたのように僻みっぽく生きている人つて、私、嫌いな」と言われるのが落ち？

このように、どこかしこに行つたと書くと、友人から、「あんたつて浪費家だったんだね、金もないくせに」と言われそう。だから一言弁明しておかなければならない。屋久島以外はみんな青春18切符を利用して行つたのだ。もちろん握り飯・お茶持参。屋久島行きも二泊二日の超特価ツアーに便乗しての旅である。

石川啄木、室生犀星、金子みすず、若山牧水など訪れた先をあげれば限がないが、彼に悔いはない。青春18切符に感謝することしきりなのだ。

尾道は林芙美子文学のスタートラインである。やはり、尾道でなら倒れてもいい、死んでもかまわない、それこそ本望だと仁志爺さんは改めて思つたのだった。